

2

文芸評論・研究 II

ゆまに書房

内田魯庵全集第二卷

五五〇〇円

昭和六十一年四月二十四日 初版

著者 内田魯庵

編者 野村喬

発行者 荒井秀夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 株式会社 川製本

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町

電話 (二九二)〇七九八

振替 東京四一六三一六〇

内田魯庵全集第二卷／文藝評論・研究Ⅱ 目次

文學一斑	五
文學者となる法	一七五
ジョンソン	三〇〇
芭蕉庵桃青	四一二
芭蕉後傳	五一二
東花坊支考	五七三
荻生徂徠	五八〇
解題	六三九
解説	六四一

文藝評論・研究Ⅱ

文學一斑

凡 例

一題して文學一斑といふ。是れ僅に、一班を説きしものに過ぎざればなり。文學は極めて幽奥にして推究する事愈々深ければ愈々盡くる處を知らず。豈此一小冊子が能く説き盡し得るものならむや。

一本篇説く處は尋常一様にして、識者既に熟通するの言なれば、遼東の白豕素より之を甘んず。江湖願くは其卑近淺膚なるを笑ふ勿れ。畢竟是れ文學の入門たるに過ぎざればなり。

一詩を説くに當て、先づ「美」を説かざるべからず。然るに此篇は一言「美」に及ばず。其間或は摸索しがたき處あらむ。是れ「文學」なる語の殆んど「カーレント、ウオルド」となりしを以て此語を解説する事の極めて必要なるを信ずればなり。

一篇中に定義を下せし處あれど、諸般學術の第一原理猶ほ朦朧たる間に焉んぞ正確なる定義を作るを得んや。余はカフライルの如く「定義の空漠たるは當然なり」といふものにあらざるも定義は畢竟「假

定」に過ぎざるを信ず。

一識者あり曰く、批評家は詩人を作るを得ずト。此言或は是ならむ。若しレツシングの「ラオクーン」にして、ハルトマンのエッセイ美學にして、鷗外氏の棚草紙にして、逍遙氏の早稻田文學にして果して此毀言を値ひするものならむには、淺膚なる余が文學一班焉んぞ能く三文詩人をだに作るを得んや。畢竟是れ文學の入門たるに過ぎざればなり。

一要するに此陋見勿論博涉精通なる識者の嗜讀を煩はすに足らず。余が欲する處は探偵小説に垂涎し新聞の續き物に待焦るゝ婦人小兒、若くは小説をもてはかなき根なし草と爲し輕率に是を冷視する淺見者に示さんとするにあり。然れども其文字は拙劣其用意は疎雜なるをもて或は晦澁に陥り或は放浪に流るゝの點また多からむ。況んや余が謗才鈍識は中々に文學の真相を喝破するの力に乏しければ、此一篇素より正鵠を得たりと曰はむや。畢竟余が思ふ處斯くの如しと云ふに過ぎざれど愚考万一にも文學の入門とも爲らば則ち余が幸のみ。

一今や文壇名家に富む。博學宏聞若くは識見超邁の士乏しきにあらざれば、漫りに後進を以て文學を論ずる事極めて僭越に似たりと雖とも、却て是れ研究せし結果を述べて以て江湖諸君子の示教を待つも、願くは其莽鹵を憐んで之を咎むる勿れ。

一余や淺學迂慮、加ふるに識狹く見低ければ以て文學を談ずるものにあらず。既に校するに臨んで其説の迂陋を恥づる處頗る多かれ。他日必ずや稿を更めて再び世の示教を仰ぐ事あらむ。

第一 總 論

ワシントン、アービングのウェストミンスター教堂を訪ふや、累代詩人の墓隅に謁して後、其所思を記して曰く、

人の無窮に傳へらるゝは、大抵歴史の媒介に頼るなれば、物變り星移るに連れて、次第に朦朧暗淡に歸するを免かれず。獨り文學者が同人に於ける信交は、常に生新快活且つ直接にして、彼は自己の爲めよりは寧ろ諸人の爲めに生存し、四邊の歡樂を犠牲と爲し、浮世の興を打捨てゝ、後の人また末の世と語らむとて、餘念なく一生を暮したりき云々。

千年の遠き昔となりて、歴史は既に杳冥たりと雖ども、論語に接すれば親しく仲尼の教を受け、南華經を讀めばさながら莊周に嘲けらるゝの感を起し、章句の間髣髴として温乎たる其貌かたち飄然たる其姿を認むるを得む。蓋し二者の思想が萬人の胸板に徹するの力他の音樂或は繪畫に比して大に秀すぐるゝは、是が媒介たる文字の音樂に於ける聲調若くは繪畫に於ける色彩と異なりて悉く完全なる意義を有するを以て直接に其感觸を與ふればなり。

何人も能く知らむ、亞米利加の士氣を鼓舞せしは革命之檄にあらざるか、佛蘭西の民心を噪狂せしは馬耳塞マルセイユの歌にあらざるか、昌黎の文は鱷魚の暴を鎮め、晋子の句は夕立や田を三めぐりの神を動かしぬ、是が爲めに英雄豪傑も其膽を破られ、是が爲めに惡鬼羅刹も其腸を斷ち、一韻一句に悲喜哀歡の情を左右せら

るゝは抑も何等の魔力ぞ。冷鐵も忽ち熱し堅氷も瞬時に解く文學の力偉なる哉。

此魔力を有する文學とは何ぞ、古往今來何人も能く是を理解するが如くして而も是か確然たる定義を與へたるものなく、社會一般思想の發達と共に其意義も變轉せしが如し。蓋し文化未だ進まざりし時代に有つては、人間の智識淺く學界の區域猶ほ狹隘なりしを以て、是を解くも亦簡易なりしかど、次第に發達して深遂に趨るほど愈々錯雜して、學海の茫々たるを知ると共に精細なる考查は益々精細となりて、昔日は漫然説去つて衆人毫しも怪しまざりしものを、今は分拆の上に分拆して猶ほ是に満足せず、推窮の上に推窮して終に是に安心するを得ざるほどなれば、唯箇一語「文學」の義解に苦むも又勿論也。

上世水草を追ひし時代に文學なし。其「文學」なる形を生ぜしは如何なる時代なるや混沌として知るに由なけれども人次第に言語通じて單純なる舌唇を振つて相試む時、自然の法則として外界に觸るゝ毎に喜怒哀樂の情を起すは必然なり。雷霆叱し風神怒る彼等は畏懼して哀を天に乞ふ。是時に於て口に發する號泣祈念の聲は以て一種の詩と爲すを得む。若くは苦闘して敵に勝ち或は愛人と相逢ふて馴るゝ時彼等は歡喜して蠻音を發し舞踏を爲す、此蠻音は亦一種の詩にあらざるか。然れども文字素より無く詩の形未だ成らざりしが、人の稟性として秘れたるを顯さんとし知らざるを悟らんとするのみか、猶ほ他に教へまた傳へんとするは自然にして、此稟性は結繩に始まり終に鳥跡に及び耳目の感觸を假りて是を音に取り是を形に象つて文字を創造せり。爰に於て文學萌芽の素成る。

むかしは文武兩道と曰へり。然れども此文と云へるは武技に對しての言にして未だ文の質を云ふにあらず

るなり。徂徠の答問書に「吾國の俗説に文武二道と申す詞有之候是は中古より公家武家とて家別候より公家の傳候藝を文道と唱へ、武家傳候藝を武道と名附候俗説迄の事に候詩歌も弓馬も藝にて候を文旨なる者の名附申習しにて候」とあるは能く文道を説明せしにあらざるか。

又文字の上より説くものあり、苟くも文字を陳ねしもの則ち是れ文學なりと。此説根據する處なきにあらざるもまた疎鹵に失するが如し。文字を陳ねて而して文學と云ふを得べくんば算數法政惣て文學ならざるはなく、統計表も法律規則もまた文學書たるを得む。是れ素より文學を詳悉せしにあらず。

古來より支那日本共に文學の定義を與へしものあらずして、常識の上より學問と云ひ文章と云ひしも、其性質に到つては毫も講ずる處なかりき。畢竟理化學は秘密の中に葬むられて昏昧たりしかば、所謂儒なる者は純正哲理に安んじ實驗を崇ばざりし故に、學問と云へば唯先王の道に限れる如く思ひ、醫本草の類は殆んど學問外に置き、特に文學と名けざるも直ちに是を學問と混同せり。而して學問即ち文學と文章との關係に到つては頗る漠然たるに甘んじ、恰も善惡邪正を口にするも確然たる標準を知らざるに同じく、學問と云ふも文章と云ふも彼等は考へずして、或は文章も學問の一なりと云ひ、或は學問は本にして文章は末なりと云ひ、紛々是を説去つて終に文學の何物たるに及ばざりき。津阪東陽は曰く、

詩之於學者、也特其剩枝耳。行有餘力、乃以學之。君子不_ニ必議_ニ也。近時學風輕薄、舍_レ本而趨_レ末。以_レ詩爲_ニ性命_一。六經群史一切東_ニ之高閣_一。唯屹_ニ屹_ニ於_ニ五字七字之中_一。抽_レ黃對_レ白、翫_ニ惕時日_一。云々

是れ學問と文章とを混同して一と爲すの謬説に出づ、學問豈文章と一ならむや。

パスカルは曰へり、人間の思想に二あり一を數學的思想と爲し一を情感的思想と爲すと。此説を爲すもの獨りパスカルのみにあらで古今頗る多し、蓋し相期せずして合する處皆に白壁に面して會得したるのみならず、實驗の上より見るも當れるに近きを以てならむ。一を割て二と爲し二を割て四と爲し天を望めは星辰の所在を詳かにせむ事を欲し地を見れば土層の性質を窮めむ事を願ひ草木の生長を量り昆蟲の肚を剖くは是れ數學的思想なり、或は花爛漫たる春の景色に浮れて蝶と共にさまよふや條爾にエンジェルを空際に現じ、或は怒濤澎湃として來り一葉片々吞まれむとするや忽然として海坊主を水上に見る、是れ情感的思想なり。此二者は人間共に有する處にして、一方に偏すれば恒河の砂をも數へんと欲し又一方に偏すれば木に縁て魚を求むるを怪まざるに到る。而してたゞ意を以て直ちに身を處し能はざるものが事物に觸るゝ毎に情或は智に慙へて満足を求むるは自然の數にして怪むに足らず。殊に氣鋭雋爽の士がまゝ熱焰して兩極端に馳するは免かれざるの事實にして、爰に於てか詩人若くは哲學者を生ずるにあらざるか。

等しく情感的思想なりと雖とも、是を表白するに或は會意的を以てし。或は分拆的を以てす。會意的を以てするものは思想を形像の上に表はして是を直覺せしめ、分拆的を以てするものは思想其まゝを分拆して是を理解せしむ。一は譬喩形容を設けて覺らしめんとし、一は解拆釋義を試みて説かんとす。蓋し二者各々所長ありて共に學海の水路案内者たれば相隨伴して離るゝ事なしと雖とも殆んど背反したる研窮法をもて互に結托して以て文學を爲す。而して文學の主因たる感情的思想を會意的に表白したるものを詩と云ひ、分拆的に説明したるものを哲學と云ふ。ペリンスキーは此二者を論じて曰く、

詩と哲學と常に相關係して常に相和せず、二者の故國たる希臘に於て見るも所謂哲學者は曾て桂冠を獻げて詩人を賞揚せしと雖とも終に是れを想像社會の外に追逐せり。一般社會は詩人を見て以て最も活潑熱心なる者と爲し、過去將來を遺却して獨り現在に沈溺し、唯快樂あるを知て利益あるを知らず、而して其快樂を求むるの念は尤も深ふして曾て飽足せし事なく、風采傾癖は常に變轉して定まらず、又懔然たる想像力に富むが故に絶えず實境を離れて空想の中に彷徨し、而して現在の幸福は是を捨て却つて頼むべからざる空想を尙ぶものなりと爲す。

哲學者は是に反して常人の解すべからざる人生の最大幸福たる至賢に心醉し、唯一不變の目的を執て堅く動かず其行爲は智ありて、其希望は適度に利益また眞理を尙むで愉快娛樂を卑み、能く確然たる實益を尋求し、且つ其原因を人生浮榮の皮相若くは雜駁なる「カレイドスコープ」の中に求めずして反て是を其秘寶なる不死の靈魂の中に得て以て樂むものなりと爲す。詩人は萬物の愛元、幸福なる頑童、無頼、放逸、我意。兇惡また兇惡なるが故に一層可憐なる小兒なり。哲學者は眞理及至賢の忠僕、言語中に形せし眞誠、行爲中に藏する善行と爲す。(中略)要するに詩人の哲學者に於けるは、活潑激烈狂誕豪放なる想像の冷々索々難澁險快莊重なる智識に於けると同じ云々。

二者の相離るゝ斯くの如くにして其現象を見れば到底全一なる範圍内に置く事能はざるが如けれど、また如何にしても隔つる事を得ざるは二者の目的及理想は殆んど全一世界に在つて、詩人が胸を打つて其心肝を吐くも哲學者が頭を曲げて其腦漿を沸すも間接に又直接に大道を踏むで眞理を求め衆生を擧げて其理想

界に奔らむとするものならざるはなし。ペリンスキーは又説て曰く、

詩と哲學は共に同一の目的を有し共に上天に赴くものなりとす、即ち一般社會の詩に歸するは人生の最も美なる神工の形像を作り依て以て人をして高尚なる感情を起さしめ依て以て人心をして九天の上にあらしむるの神力を以てす、然れども哲學は人心上天及び其高尚なる感情とを合せずして夫の人生通則の活識を以て高尚なる感情を起さしむるものなりとす云々

されば相離るゝと雖ども素と其根蔕を全ふして是を別種と爲すを得ざるなり。又詩を以て哲學の附屬物と爲すを得ざると全じく、哲學を以て詩の附屬物と爲すを得ず。又詩想を以て人間の唯一思想と爲す能はざると共に、哲學的思想を以て人間の唯一思想と爲す能はず。又詩を以て人間の最大嗜好と目すべからざる如く、哲學を以て人間の最大嗜好と目すべからざるなり。是二者相待て進み以て宇宙の秘密藏を開き人生に最大福利を恵むを得む、則ち是二者を合して是を「文學」と云ふ。

されば文學の範圍は最も廣くしてカントの純理論ヘーゲルの「ロジック」或は沙翁の戯曲カアラルの論文皆是を以て文學世界の生産物と爲すを得む。

兎に角學術の範圍狭かりし時代殊に理學の發達せざりし時代に有つては文學の意義暗朦たるは怪むに足らず。ボス子ツトの記せし處に従へばタシタスは *literatura Groeca* なる句を希臘文字の形を現はさんが爲めに用ひ、クインティリアンは全じ *literatura* を文法の義に考へ、シセロは學問の總名に解きしと云へり。全盛を極めし羅馬の時代猶ほ且然り、支那日本に於て確然たる意義を與へざりしも勿論ならむ。

然れども此二大分類詩と哲學との關係に到つては頗る模糊たるも猶を曖昧に認識したるが如し。支那人が荐りに文と道の二者を説きしは素より疎枝に過ぎざるも又詩と哲學に於ける關係に近からむか。李漢は曰く文者貫道之器也ト。晦庵は曰く文者載道之器也ト。貫道と云ひ載道と云ふ素と殆んど同義なれば其是非は先づ論外に置いて以て學界に文と道との二者相隨伴するを會得するを得べし。唯其判然たる限界に到つては誰人も是を説かず、又説くも其形に安んじて其質に及ばざりし也。

較や説き得たるものは曰く、道は形なくして文は迹ありト。是れ道と修道とを混ざるの言にして、若し説者にして然らずと云へば文もまた迹あらむや。獨り文に於て迹ありとなして道の形なきを云ふは道と修道を混和して一と爲すの誤想にして、果して然らむには文と道の二者を説くも詩と哲學に於けるとは全じからざるなり。

社會は日に轉化し其外相を更むると共に各般の文義も亦變遷するは實事にして、法三章を約せし時代の「法」とアオースチン或はブルンチュリイの「法」とは其義を異にす、文學又斯くの如し。文字と文學と異なるは云ふまでもなし、然れども昔人は是を同一にせり。書籍と文學と異なるは云ふまでもなし、然れども昔人は是を同一にせり。算數と文學と異なるは云ふまでもなし、然れども昔人は是を同一にせり。政務と文學と異なるは云ふまでもなし。然れども昔人は是を同一にせり。單純なる思想をもて區畫する事の難きは當然なりと雖ども、今にして這般空漠に安んずるは進むに躊躇せざる人間の爲さざる所にして、万人協力吳越相結んで暗雲を排き眞理の光を認めざるべからず。知つて其一路に志す者あり、知らずして其一路

に志す者あり。兎も角も人は進むの性を有す、縱令自然の法則より見れば退くにもせよ。

かくて人の進化果して實事たらば、社會の發達と共に人類理想も亦長ずるは怪むに足らず。熟々考ふるに人類の進歩と一個人の進歩とは素と相像似して、胎を出で呱呱乳を求むる孩兒漸く長ずれば竹馬に跨つて石を飛すお山の大将となり、忽ちにして青年、忽ちにして壯年、外界に伴ふて終に則を超へざるに達せむ。社會の壽幾何なるやを知らず、現在の社會は少年なるや又壯年なるやを知らず。兎に角に相類したるは歴史の證する所にして、猶ほ搖籃の中に在つて無想無念に暮せし上古の人間が其保姆たる萬物の爲めに育成せられ、僅かに口碑を信じて是に安心せしは云ふまでもなく、漸く文字を發明して、秘密を蘊み得ざる人間の性として木に刻み石に彫りし時に於て、較や文字の嗜味を感得せしならむが、此象形文字を樂みし上古の人間は、焉んぞ今日に於て其文字が「文學」なるものを組成する事を夢視せんや。野蠻人民は鳩舌を弄して意味なき歌を唱へり、孟浪たる想像は荒唐不稽の怪譚を作りて堅く是を憑信せり。然れども焉んぞ知らむ、此意味なき歌また荒唐不稽の怪譚が今日偉大の力を有する「ポーエトリー」の素ならむとは。漸く進むで、人自ら歌を作つて是を書し物語を編むで是を残すの時に到れば、人の思想は自ら一個の見地を作りて、勿論朦朧たるも「文」なる文字に較や深き意義を與ふるを承認せり。爰に於て曰く「文はアヤなり」ト、「人の心をたねとして萬づの言の葉とぞなれりける」ト

怪しむに足らず、むかしより「文學」の意義大に明亮を缺けるのみか、次第に其變移せるが如きも。思想漸次に高まりて何事にも及ぼすと共に「文學」の意義も益々深くなれり。むかしは文學とは文書き習ふ術